

アハブ王夫妻のぶどう園主ナボテに対する仕打ちは目に余りましたが、主の戒めの言葉におののきへりくださったアハブの心を主は受容されました。

1. アハブとヨシャパテ (1~4)

- ①三年が過ぎ (1)「アラムとイスラエルとの間には戦いがないうまま三年が過ぎた。」さて、ベン・ハダテが治めるアラムと、アハブが治めるイスラエルの間は、三年間穏やかで、戦いもありませんでした。
- ②ヨシャパテ (2~3)「しかし、三年目になって、ユダの王ヨシャパテがイスラエルの王のところを下ってくると、イスラエルの王は自分の家来たちに言った。『あなたがたは、ラモテ・ギルアデが私たちのものであることを知っているではないか。それなのに、私たちはためらっていて、それをアラムの王の手から奪い返していない。』」南王国ユダの三代目の王ヨシャパテは父アサからの信仰を受け継ぎました。その時に、アハブは北東の地ラモテ・ギルアデが自分達のものであると家来たちに主張していました。
- ③ラモテ・ギルアデ (4)「それから、彼はヨシャパテに言った。『私といっしょにラモテ・ギルアデに戦いに行ってくれませんか。』ヨシャパテはイスラエルの王に言った。『私とあなたとは同じようなもの、私の民とあなたの民、私の馬とあなたの馬も同じようなものです。』」アハブはヨシャパテに、ラモテ・ギルアデをアラムから取り戻すために、共に戦いに行くことを持ち掛けました。ヨシャパテはそれを受け入れます。

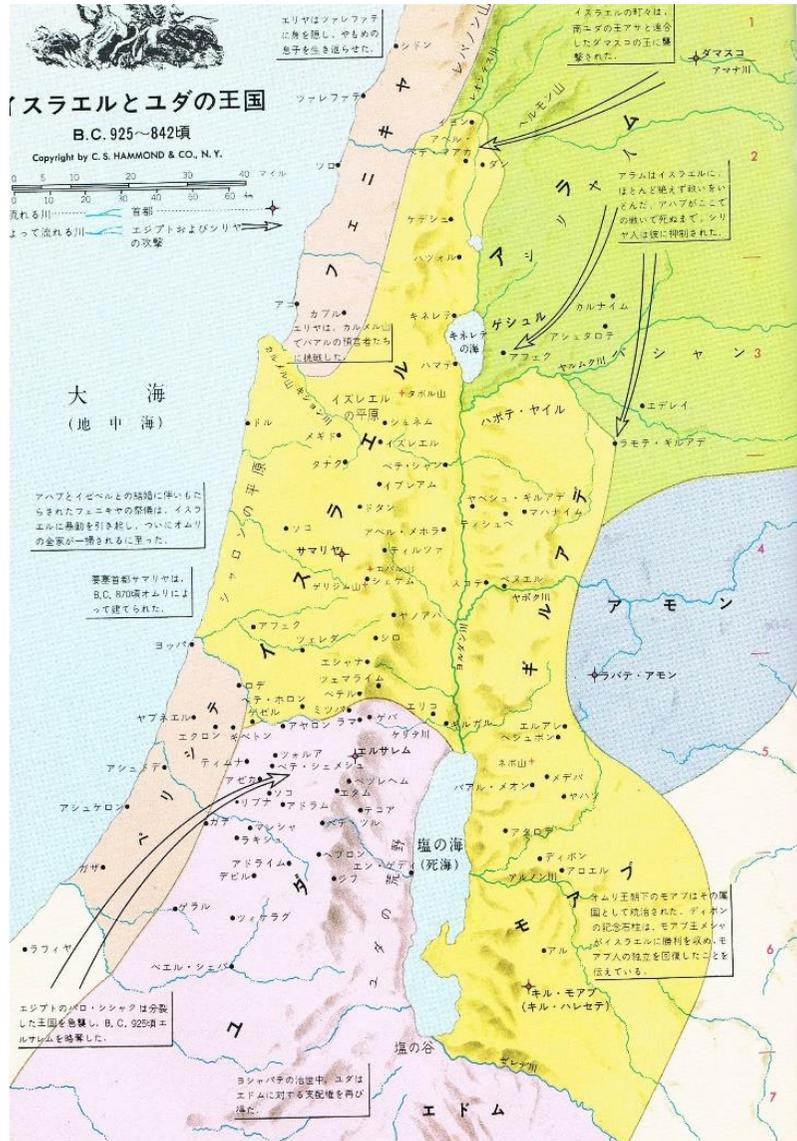
2. 同じような預言をする預言者たち (5~12節)

- ①四百人の預言者 (5~7)「ヨシャパテは、イスラエルの王に言った。『まず、主のことばを伺ってみてください。』そこで、イスラエルの王は約四百人の預言者を召し集めて、彼らに尋ねた。『私はラモテ・ギルアデに戦いに行くべきだろうか。それとも、やめるべきであろうか。』彼らは答えた。『上って行きなさい。そうすれば、主は王の手にこれを渡されます。』ところが、ヨシャパテは、『ここには、私たちがみ

こ

ころをを求めることのできる主の預言者がほかにいないのですか。』と言った。」ヨシャパテは神の御心を模索します。それに対し、アハブは 400 人の御用預言者ともいえる者達を召しだします。そして戦争に出ることの可否を問いますが、ヨシャパテはその預言者達を信頼できませんでした。

- ②ミカヤ (8~9)「イスラエルの王はヨシャパテに答えた。『いや、ほかにもうひとり、私たちが主のみこころを求めることのできる者がいます。しかし、私は彼を憎んでいます。彼は私について良いことは



預言せず、悪いことばかり預言するからです。それは、イムラの子ミカヤです。』すると、ヨシャパテは言った。『王よ。そういうふうには言わないでください。』そこで、イスラエルの王はひとりの宦官を呼び寄せ、『急いで、イムラの子ミカヤを呼んで来なさい。』と命じた。』アハブ王は預言者ミカヤがいることを伝えました。しかし、ミカヤは

アハブが自分について否定的な預言をすることから、彼を憎んでいました。ヨシャパテに促されたアハブは、宦官に命じてミカヤを呼び出します。

③預言者たち (10~12) イスラエルの王と、ユダの王ヨシャパテは、おのおの王服を着て、サマリヤの門の入口の打ち場 (広場) の王の座に着き、預言者はみな、ふたりの前で預言していた。そのとき、ケナアナの子ゼデキヤは、王のために鉄の角を作って言った。『主はこう仰せられます。《これらの角で、あなたはアラムについて、絶滅させなければならない。》』ほかの預言者たちもみな、同じように預言して言った。『ラモテ・ギルアデに攻め上って勝利を得なさい。主は王の手にこれを渡されます。』サマリヤの門の打ち場に王服を身にまとった二人。預言者たちが預言します。その中の一人ゼデキヤは「アラムを絶滅させよ」と、鉄の角を作るといったそれらしい工作をして言ったのです。他の預言者達もラモテ・ギルアデに攻めて勝利せよと言います。

3. ミカヤの預言 (13~17)

①主が告げられた事を (13~14) 「さて、ミカヤを呼びに行った使いの者はミカヤに告げて言った。『いいですか。お願いします。預言者たちは口をそろえて、王に対し良いことを述べています。お願いしますから、あなたもみなと全く同じように語り、良いことを述べてください。』すると、ミカヤは答えた。『主は生きておられる。主が私に告げられることを、そのまま述べよう。』」使いの宦官は事を荒立てないように、預言者ミカヤに、王に対して良いことを述べるよう願います。ミカヤは、生きておられる主が告げられた通りに語りますと応えます。

②王の諫め (15~16) 「彼が王のもとに着くと、王は彼に言った。『ミカヤ。私たちはラモテ・ギルアデに戦いに行くべきであろうか。それとも、やめるべきだろうか。』すると、彼は王に答えた。『攻め上って勝利を得なさい。主は王の手にこれを渡されます。』すると、王は彼に言った。『いったい、私が何度あなたに誓わせたたら、あなたは主の名によって真実だけを私に告げるようになるのか。』」アハブ王はミカヤに当該問題を尋ねます。すると、なんと応えは同じで「攻め上れば勝利する」でした。アハブは意外にも「真実だけを私に告

げよ」と諫めました。

③飼い主のいない羊たち (17) 「彼は答えた。『私は全イスラエルが、山々に散らされているのを見た。まるで、飼い主のいない羊の群れのように。そのとき、主は仰せられた。(彼らには主人がいない。彼らをおのおのその家に無事に帰さなければならない。)]』すると、ミカヤは改めて答えます。ミカヤに与えられた幻でした。全イスラエルが山々に散り、飼い主のいない羊のようになっているので、主は彼らを各々の家に帰さなければならないと言われる、というものでした。つまり、ミカヤはラモテ・ギルアデに行けば、敗北するので行くべきではないと預言しているのです。

《結論》旧約聖書時代の預言者のはじめは、モーセといって良いでしょう。彼は神から律法を預かり、それを民に語り告げました。十戒に集約される律法をもって、民を導きました。モーセは族長であり、預言者でもありました。預言者としてはっきりと任ぜられたのはサムエルでしょう。サムエルはエリのもとで育ち、彼のことは地に落ちず、全イスラエルは主の預言者に任ぜられたことを認めたのです (Iサムエル 3:20)。

預言者はその漢字からも明らかのように、神から御言葉を預かって語る人です。予言者ではなく、預言者という点に注目しておきましょう。もちろん、神から預かる言葉のなかには、将来のことについてもあります。メシヤ預言はまさに、救い主が将来に来臨するという預言でした。しかし、預言は将来のことだけではなく、現在に生きる民に対して、導きや戒めや慰めなどの御言葉を主から預かり、語り告げる存在だったのです。

ことに偶像礼拝がはびこる時代にあつて、預言者は神からの御言葉をもって、その間違いを指摘する必要がありました。第一列王記の学びを通して、エリヤはその働きをなした代表的な人物であることは見てきました。しかし、現実的には、それを語るのには信仰に基づく勇気が必要でありました。なぜなら、預言を語ることはすなわち、自分の命の張ることでもあったからです。バアル信仰に凝っていたアハブ王のような人に預言の言葉を伝えれば、命を取られる危険があったのです。

そんなことから、今朝読んできたなかにも、いろいろなタイプの預言者が登場します。400人もの預言者が出てきますが、読んでわかるように、その大方は御用預言者でありました。彼らは、神から預かった言葉を語るというよりは、為政者を喜ばす発言をして、彼らに安心を与えたりする役割でした。

この聖書箇所にはその代表としてのゼデキヤがいました。ユダの王ヨシャパテは信仰がありましたから、それを見破っていました。そ

ここで、暗に本当の預言者を求め、アハブの嫌うイムラの子ミカヤを呼びださせたのです。ミカヤは、他の預言者たちがアハブにおべっかを使って、ラモテ・ギルアデでの戦いをすることを勧めたのに対し、与えられた飼い主のいない羊の群れというビジョンを語ることを通して、それを否定したのです。多勢に無勢でしたが、大胆に伝えたのです。

私たちの信仰生活において、ミカヤからおしえられたいのです。この国にあって、キリストを信じる歩みをしていく時には、生き方や文化などにおいて、必ずしも歩調を合わせられないことがあるでしょう。そのような時に、自らの信仰の姿勢を貫くには勇気も必要でありましょう。クリスチャンとしての信仰を守るために、異教的習慣や迷信などを行わないことには戦いもありましょう。また、クリスチャンであることを証することにも恥ずかしさがあり、覚悟しなければならない面もあるでしょう。しかし、そこに祝福があるのです。心を決めてしまえば進めます。「私は福音を恥とは思いません。福音はユダヤ人をはじめギリシャ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。」（ローマ人への手紙 1 章 16 節）